

# ともに 歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔。  
暗闇に立ちすくんだ時、  
この記録が足元を照らす光となるように。  
そしてまた明日の朝を迎えられるように。  
朝日新聞社員がつづる。

石巻だよりは、春夏秋冬の  
季刊に変わります。  
春号では「明日の風」特別  
編をお届けし、「子どもたち」  
は休載します。

## 明日の風

# 知っているからこそ 千年後の命を守るために

は東松島市の矢本第二中学校の教頭。

あの日は小学6年生だった女川町の子どもたちが、「女川1000年後のいのちを守る会」をつくり、高校3年生の今も活動をつづける。知っているからこそ、これからも。生涯つづけていく。

## 熊本地震

### 「何かできないかな」

今年4月の土曜日の夕刻。JR女川駅そばの会議室に高校生7人が集まった。別々の高校に通う3年生たちだ。

皆あの日女川町の小学6年生。女川中学校を卒業後こうして休日に集う。「女川1000年後のいのちを守る会」の会員たちだ。阿部一彦先生も一緒だ。彼らが中学1年の時の学年主任で、今

この日、伊藤唯さん(仙台育英)が口火を切った。「熊本で何かできないかな」。色白の丸顔にえくぼが浮かぶ。待っていましたとばかりに皆、口々に話し出す。募金か。支援助資か。

「物ではない気がする」と言う木村圭さん(石巻)に、鈴木元哉君(同)が「遊びも大切。集まれる場があれば」。圭さんも「友達だよな」。

そこで「行く?」と先生。即、「行く」と唯さんが声を上げる。交通費は会の貯金で賄えるか。「足りない分は自腹」と山下脩君(石巻工業)が迷わず言い切る。熊本行きの話に沸いた。

守る会の活動は、中学1年の社会科の初授業で一彦先生が投げかけた言葉「ふるさとのために何ができるか」から始まった。その時、先生は目を見張った。生徒は次々に津波への備えを

説く。1年生は六十数人。半年後、皆で「津波被害を最小限にする方法」を議論し、1年の最後に作文を書いた。

今野侷美さん(石巻好文館)の作文に先生は息をのんだ。まずは皆が津波のことを知る、と書き出す。間違った知識で亡くなった人が多いから。さらに「千年後まで伝えるために記録に残そう」と訴える。それは、授業の域を越え、まるで「祈り」のようだった。

「千年後の命を守るために」が活動の合言葉になった。ただ、皆がすぐさま活動に意気込んだわけではない。熊本地震の被災地への支援を言い出した伊藤唯さんも、ちがった。

あの日。坂を駆けのぼる途中、眼下の光景に立ちすくんだ。街は消え、海が渦巻く。避難先の体育館で夜通し響いていた人々の泣き声。その記憶は今この季節もよみがえる。

中学入学後は「普通に笑つていよう」と心がけた。内心は苦しい。頭痛がやまず、仮住まいの家で母にあたった。

中学2年の冬、活動を支える「親の会」が発足した。母も加わり、唯さんの背中を押しつづけた。

## 何人もいた「伝えないと」

活動の第1弾は、町内21カ所の浜の津波到達点に石碑を建てることだった。

中学3年の秋。山下脩君、渡邊滉大君(石巻好文館)、阿部由季さん(同)ら生徒4人は、1基目の石碑の制作を見に石材店へ。自作の文を記した紙が高さ2メートル超の石に貼つてある。

まだ刻む前。紙には「大きな津波が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください」とある。原文は「大きな地震が来たら」だ。修正した。

次の「逃げない人がいても、無理無理にでも連れ出してください。家に戻ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めてください」は原文通り。

引率の一彦先生が4人に問う。「なんで引き留めないといけないの」「戻つて亡くなった人がいるから」。「何人へ

知っている」と畳みかけ、答えを待たずに「俺も知っている。俺が戻れと言えは助かってた。碑だけではだめなんだ。この奥にあることを伝えないと」。先生の目が潤む。山の上の中学校へ娘の無事を確認に来た母親が山を下りるあの時、引き留めていたら……。

脩君、湊大君、由季さんたちも思い出していた。それぞれが知る人々を。

今、石碑は9基立つ。守る会はそのつど浜の人々を招いて除幕式を開く。

高校2年の夏、野々浜でも式があった。守る会からは脩君が出席した。

式前に岸壁で避難訓練を行う。脩君が「震災前の地形だと想定して、石碑には行かず、地元の人にも聞かずに避難して下さい」と説明し、震度7の地震発生を告げる。

「親の会」の父親が車椅子で待機。土地勘のない参加者が父親を連れて山道へ。その後、石碑前で浜の人の解説を聞く。山道にも津波は達したと知る。

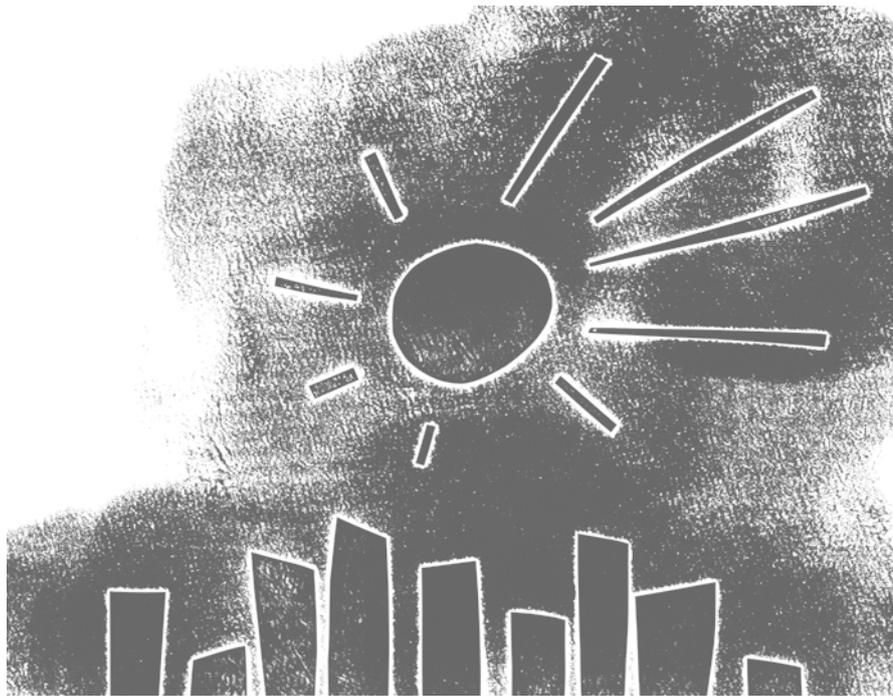
参加者が問う。「石碑をめざせば助かりますか」。脩君は「これより高い所に逃げてもらえれば」。「ここではだめですか」との再度の問いにも、きっぱりと「実際の津波が来た時にどうなるかわからないので」。

最後に一彦先生が浜の長老へ

話を促す。あの日、引き留める声を聞かずに山を下りたことを語った。「自信過剰にならないで人の話を聞いて下さい。自信過剰になりますとね、必ず命は離れてしまう」。参加者も涙をぬぐった。

## 「残っているなら いいじゃない」

守る会は今、「いのちの教科書」制作にも取り組む。小中学生へ命を守



るすべを伝える本だ。そのために女川町誌や石巻市史を読み込み、津波発生者の仕組みを学びに東北大学も訪ねた。体験も記す。高校1年の冬に十数人で合宿。各自、黙々とパソコンをたたき、息をついた。画面の文字は「町が真っ黒になっていました」。あれから3日後の描写だ。その日、県外へ避難。

小学校の卒業式は出られなかった。

高校2年の冬も十数人で合宿。渡邊湊大君は女川町観光協会の震災前の冊子を参考に開き、釘付けになる。「光太郎の碑」と声に出す。山下脩君が明るく「高村光太郎の碑あったな」。鈴木元哉君も顔を寄せて「穴釣りやんなかった?」。湊大君が「岸壁の穴?」。「そう。穴から風くるの。ぴゅーって」「くせえの」「懐かしくねえ、これ」。今はない街を思い出す。

守る会は、高校2年の秋から冬にかけて相次ぎ表彰を受けた。東京で「社会貢献支援財団」から。さらに神戸市で「1・17防災未来賞『ぼうさい甲子園』」にて。表彰式に出向く機会に、隣の中学校とも交流を深める。今年1月。湊大君と脩君は神戸市の長田中学校に生

徒会役員を訪ねた。守る会を紹介し、「中学生ができることはいっぱいあると思う」と声援を送る。それから一緒に長田区役所の資料室も見学した。阪神大震災の大火災で焼け残った硬貨がある。私の目には広島平和記念資料館に重なった。炎の勢いを物語る品々をそつと手にする。

その晩、私は尋ねてみた。「どう映ったかな」。湊大君と脩君はしばらく押し黙る。脩君がぼつりと「残っているならいいじゃないって思った」。

湊大君の家は全壊。残っていたのは浴槽だけ。幼い頃の背丈を記した柱もない。脩君の家も。大切にしていたミニカー、財布、そして枕も消えてしまった。巨大な喪失感を抱きしめる。

この春の始め。守る会の阿部由季さんと木村圭さんはJR女川駅にいた。新しい駅前商店街を見つめて由季さんは「前の形なくなっちゃったね」と漏らす。圭さんは「もう思い出せないな」と言いかけた言葉のみこんだ。

思いは複雑だ。街がきれいになるのは良いこと。でも、それは震災があったから。震災がなければ命を落とすことはなかった1人ひとりと思う。

守る会の会長を務める由季さんに私は尋ねた。「由季ちゃん、会はいつまでつづけますか」「いや、限りはないですよ」と即答し、照れたように笑った。1人でも多くの命を救うには人任せでなく自分も。生涯つづけたい。

# 雄勝巡礼

## 第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった  
雄勝病院の家族の話が続けよう。

### 「第1回」

## 大学の入学式へひとり緊張して

6度目の春。  
3月最後の週末。佐々木勇人さんは引越しに追われた。

石巻市中心部、大橋のたもとにある長屋から、仙台市郊外に新築した二戸建てへ。

仮住まいの長屋では父の幸手司さんと3人の子と5人暮らし。テーブルを置くスペースはなく、小さな卓袱台を囲んだ。

新居ではテーブルもソファも購入。それなのに、仮住まいから持ち出す荷物は「なんと多くびっくりポンです」。NHK連続テレビ小説のヒロインの口癖をまねる言葉に喜びがにじむ。文教大学の湘南キャンパス（神奈川県茅ヶ崎市）に通う長女の春香さんも手伝いに帰ってきた。

その最中だ。勇人さんの携帯電話が鳴った。ことし88歳の幸手司さんのショートステイ先からだ。便通がないので病院へ連れていけないかとの打診。今は無理だ。「水を飲ませてみて下さい」と頼む。綱渡りはつづく。

4月最初の月曜日。  
次女の花菜さんは宮城学院女

子大学（仙台市）の入学式へ。

春香さんもそうしたように、1人で臨んだが、高校とはまるで異なる雰囲気圧倒された。

勇人さんは、その日は仕事だった。勤務先の石巻市役所まで片道約50キロ。マイカーで通う。電車ならば時間は倍かかる。通勤には不便でも、子どもたちの将来を考えて選んだ地だ。

勇人さんに宛てて花菜さんが石巻西高校（東松島市）の3年生の時にしたためた手紙がある。卒業式を目前にした総合学習の時間。便箋が1枚ずつ配られる。

## 「お父さんとお母さんは世界1」

〈3年前の入学式からもう卒業式になってしまいました。高校受験でどこの高校を受けるか、とても喧嘩をしたけど、西高にして本当によかったと思っています。〉

そう。学力が及ばないとひるんだ時に叱咤した。西高なら中学時代の仲良しの先輩と一緒に好きなテニスが出来る。大丈夫だから受けてみる――。

た。式当日に保護者へ渡す手紙を書くようにと言われた。

級友は下書きせずに書き出す。ならば自分も。40分かけてその場で考えた約450文字をつづった。

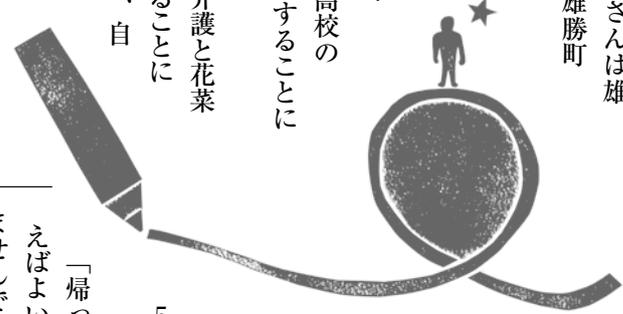
式当日の3月1日朝は晴天。街はうっすら雪におおわれている。8時になっても気温は氷点下。路面は凍結し、石巻市内の幹線道路は大渋滞に陥った。

早めに出た勇人さんは開式の1時間以上前に到着。受付で渡された手紙を、3年5組の保護者席で読み始めた。

「お父さんへ」。端整な楷書の文面に目を落とす。

震災時、花菜さんは雄勝中学1年生。雄勝町中心部の味噌作の家は流された。

中学の3階建て校舎は屋上まで津波をかぶり、約15キロ内陸の高校の空き教室で再開することになった。



〈おじいさんの介護と花菜たちの面倒をみることに時間をとられて、自分の時間をもてなかつたと思うけど、これから

は、協力をできるだけしてお父さんの負担を減らせたらいいなあと思っています。なんとかなるで生きてきた花菜の背中をいつも押しつけてくれてありがとう。〉

同じく町中心部、上雄勝の幸手司さんの家も流され、一緒に2LDKの仮住まいへ。それまで自転車にも乗っていた幸手司さんだが、あつという間に足腰が弱まり、要介護度3に。

手紙は、こう結ぶ。  
〈大学はもう少し勉強をがんばって、ねる時間をへらそうと思えます。(笑) お父さんとお母さんは、世界1◇◇これからも2人で見守って下さい。18年間ありがとう。そしてこれか

らもよろしくおねがいします。かなより。〉

読み終えた勇人さんは「お母さんは居るんですね。」

10日後の11日。帰省していた文教大2年生の春香さんは、アルバイト先の

レストランのブログに、5年前のことを記した。母からのメールに「帰ったらありがとうと言えよ」と思い、私は返信しませんでした。その直後の震災発生だった。「今も母にありがとうと伝えられないままです。」

午後。春香さんと花菜さんと長男の大輔君は雄勝町へ向かった。冬枯れの色が残る山すその味噌作の家の跡地に、立水栓がひしゃげながらも、立っていた。

そこから車で約5分先、雄勝病院の跡地へ。3人の母、弘江さんは、病院の主任栄養士だった。先に着いていた弘江さんの後輩の栄養士が駆け寄ってきて明るい声を上げた。

「大ちゃん、大きくなったねー」  
あの日、4歳だった大輔君は、この春、小学4年生になった。

## 再稼働へ舵切る国 反対すれば鞭が来そう

女川町議会は2014年夏、福島県の福島第一原発事故の被災地を訪ねた。「廃墟」と化した街を目にした衝撃を思い起こしながら「そういう現実を踏まえて女川をどうするか悩んでいるんです」と木村公雄議長(79)は語る。東北電力がめざす女川原発の再稼働にどう向き合うか。議長のインタビューの最終回を記す。

### 原発なく町経済は破綻

木村氏は、町の15年度一般会計当初予算の数字を説く。

歳入のうち、町税は約30億4千万円。そのうち約26億7千万円が固定資産税。その9割が原発関係分だ。

基金残高は、15年度末の見込みで約122億5千万円。同規模の自治体ではトップクラス。これはいわば貯金残高だ。原発があるからこそ貯金だ。

木村氏は、原発が廃炉もしくは再稼働しない場合の減収分も説く。町役場の調べでは、年間約36億円(13年度ベース)だ。

内訳は、国からの電源三法交付金約7億3千万円と、機械や装置など原発の償却資産の固定資産税分約18億7千万円、さらに民宿代など民間への発注分約10億円。「もろに町経済が破綻する。町財政が成り立たないということになるんです」と指摘した上で、こう続ける。

「福島の実況だけを見ますと、再稼働には反対が多いと思う。希望のない生活になってしまうんです。けれども、我々は生きていかなくてはならない。きれいごとばかりではいけないような気もする」

耐用年数が過ぎて廃炉になるまでの間、原発は「動かさざるをえないと私は思う」。そう結ぶ木村氏に尋ねた。

——動かせば使用済み燃料が増えます。

「そう。問題はそこなの」とうなずく。「そこを解決しないで再稼働することはありえない。ありえないんですけれども、いつ解決しますと日本中の科学者が誰も言っていない。解決まで待つとなれば、その間に、町自体、立ちゆかなくなる」

——自分たちが解決できないものを先送りし、子どもたちに委ねるのはあまりに酷。地方交付税(自治体が一定の水準を維持できるように国が再配分する国税)もある。あるいは、合併もありえるかもしれない。

「交付税をもらうなり、合併するなり、非常に簡単なことですが」と返した後、切り

出した。「1967年9月30日、女川町議会在が原発誘致を決議した時、私は町役場に勤めていたんです」

町議会が満場一致で誘致を可決した時、木村氏自身は町総務課職員だった。当時の木村主税町長が「自主財源を確保しなければ町はいずれ消滅する。だから何としても原発は誘致しなければならない」と唱えていたことが記憶に残る、と話す。

工場を誘致しようにも水産加工業しか呼べない海辺の小さな町で、84年6月、女川原発1号機が営業運転を始めた。「幸か不幸か東北で最初の原発が出来た。そのおかげで、単独の町で生き続けられたのも事実」

そして今。「この震災で人口減少率も一番大きく高齢化率も高い。我々町民に再稼働の選択を委ねることが、酷な気がするんだよね」

### 核のごみは国が答えを

——国に委ねれば、使用済み燃料の問題は先送りして再稼働するでしょう。将来も女川町で持ち続けることになりませんか。

「どうなるか、誰も分からないわけです。核のごみをどうするのか、国に答えを出してもらわない限り、町民に答えを出せと言っても、難しいんですよ」

——ごみ問題の解決が先だと声を上げなければ、押し付けられてしまうのでは。

「国に反対の声を上げて、果たして、この町に住み続けることができるのかというと、これもまた非常に難しい問題なんです」。首を横に振る。

「『国からの援助』とあえて言いますが、小さい町は援助を頂かなければ成り立たない現状もある。高齢化しているでしょ。若い人がいないでしょ。働く場所もないでしょ。ここに住む人に、国に『反対』と言いつけるだけのエネルギーがあるのか。私はないような気がする」

——閣僚や官僚は東京に身を置いていれば、女川町の日常を視界に入れずに済む。そう考えると、女川の将来は、沖縄の現在に重なって見える。日本国土の0.6%しかない沖縄に、日本国内の米軍専用施設の74%が集中する。その日常を沖縄が何度訴えても、国は一顧だにしない。

「今もそうだもの」

——今もそう。米軍施設が原発に代わり、同じことが女川にも起きるのでは。福島事故の記憶が残る今なら国民は耳を傾

ける。事故のこの余韻を逃すと、誰も顧みなくなるのでは。

「福島の後ね、九州電力の川内原発にも視察に行ってきたんです」。2015年8月に川内原発1号機が再稼働し、約2年間続いた「原発ゼロ」に終止符を打った。その前に、女川町議会は川内原発がある鹿児島県薩摩川内市を訪ねた。

「市議会も再稼働に前向きなんです。同じ原発立地自治体でも非常に考え方が違う」——使用済み燃料について市議会は。

「そこまでは議論していないようでした。国に任せておけばいいんだ、というので。薩摩川内市のように再稼働を容認する自治体がある一方で、再稼働に反対できるのか」

——「国の言うことを聞かないなら交付税をあげません」と言われる心配がありますか。

「『あげません』となると思うわけ。『協力するほうにはあげますよ』と」

——一方には餡がきて。

「うん。『協力しないほうには鞭だよ』と。そういう政策をされるのではないかなと、私も危惧しているところがあるわけです。だから非常に難しいんだ」

——再稼働反対に踏み切ると鞭が来る可能性が大きいと。

「大きいと私は思う。今の自民政権である限り。政権が変われば、また別ですけどもね」

### 国へ反対貫く情熱ない

——安倍政権は再稼働を推進しています。

「推進です。再稼働しないとすると、国の方針に相反するということになると思う。まさに今、沖縄が非常に厳しい状況になっていると思う。そこがね」

——やがて沖縄になる恐れもあるが、一方で、その恐れを払拭しようと闘うには、今の沖縄になる覚悟が必要になる。

「そう。その覚悟を町民が持てるか。先ほど言った通り、高齢化が進んでいる。若者は職がなく町を出て行く。果たして反対を貫くだけの情熱を出しきれるか。かつて、原発賛成か反対か、町を二分して争ったこともあった。あの時も最終的には、漁業権は東北電力に売却した。だから、私は、原子力に頼らないエネルギー政策を国家プロジェクトとして考えてほしい」

木村氏は「原発なしに町が生きていけるか。その答えが私は欲しい」と繰り返す。女川には3基の原子炉がある。